

いじめ防止対策を通じて生徒と教師のつながり

中間 茂治 藍野高等学校

1. はじめに

2013年9月28日に「いじめ防止対策推進法」が施行されてから、いじめに対する取り組みが各学校に義務付けられ、生徒指導の在り方が見直されている。生徒指導は、生活指導とも呼ばれるように、生徒一人一人の人間形成を目指すための活動であり、日常の生活の過ごし方、生き方、人としての在り方への「姿勢・態度」に直接働きかける教育活動である。しかしながら、対教師暴力の増加、陰湿なネットいじめ、学級崩壊、困難を窮める保護者対策等、今日の学校教育は、数多くの問題の対処に迫られている。

「いじめ防止対策推進法」は、「いじめ防止」（未然防止のための取り組み）、「早期発見」（いじめの兆候を見逃さない取り組み）、「いじめに対する措置」（発見したいじめへの対処）の3段階における具体的な対応を求めている。このうち最も重視しているのが、「いじめ防止」の段階における取り組みである。さらに、いじめ防止の3本柱として「規律・学力・自己有用感」の育成を挙げ、具体的には「わかる授業」も要求している。また、「発見したいじめへの対処」では、「速やかに止めることを最優先」としている。学校は、生徒にとって安全で安心な場所で、学び、成長する場であり、真摯に生徒と保護者に向き合い、いじめの問題を解決していかなければならない。

本研究では、いじめ防止対策の一つとして行っている「学校生活アンケート」を通じて、生徒たちが学校生活を安心して過ごせるように、どのように生徒と教師のつながりを大切にしているか

を考察していきたい。

2. 対象と方法

対象は、大阪府私立高等学校 A 高等学校衛生看護科に在籍している生徒 263 人（2014 年 7 月 31 日現在）と、A 校専任・常勤教員 19 名とした。生徒対象の調査実施方法は、2014 年度は 5 月 12 日に第 1 回、7 月 14 日に第 2 回、10 月 13 日に第 3 回、12 月 15 日に第 4 回、3 月 2 日に第 5 回、2015 年度は 5 月 11 日に第 1 回、7 月 14 日に第 2 回、10 月 13 日に第 3 回、12 月 14 日に第 4 回、3 月 8 日に第 5 回を実施した。学校生活をより良くする目的で実施するものであり、記入をしなくても生徒の不利益にはならないこと、記名する必要もないことを説明した。また、心情的な配慮として、アンケート用紙に記入した内容が見えることないように封筒に入れることを留意した。提出は基本的に翌朝の朝礼時としたが、それ以外の時間にも対応をした。

回収後、担任には極力負担をかけないように人権推進委員に提出し、集計するようにしている。また、任意で名前を書いている生徒で、気になるような内容の場合は、すぐに個人面談を実施し、必要時に個別面談実施の優先順位判断材料として活用した。教員対象のアンケートは、2014 年度第 2 回アンケート集計を全教員に配布後の 2014 年 7 月 23 日に実施した。

3. LGBTQ との関連

アンケート集計結果と、他校のアンケート結果

を分析している中で気になったことがあった。それは、自分がセクシャルマイノリティ（LGBTQ）である、もしくはそうでないかと悩んでいる生徒がいることがわかった。学校現場では、LGBTQの生徒たちは20人に1人とされている。学校はセクシャルマイノリティ

（LGBTQ）としての自己を確立し、他者と共生していくうえで様々な生き難さに最初に対面する場所である。学校におけるLGBTQ当事者を取り巻く環境を把握するとき、教師がLGBTQとのかかわりにおいて困難に感じる場面が多々ある。

LGBTQのL（レズビアン）は女性の同性愛者、G（ゲイ）は男性の同性愛者、B（バイセクシュアル）は両性愛者、T（トランスジェンダー）は生まれた時の法的・社会的性別とは違う性別で生きる人、生きたいと望む人、Q（クエスティング）は同性との依存関係で悩み、心や恋愛対象が女性になったり男性になったりで揺れ動いている人である。学校における対応

（トイレ・体育・制服・行事・他生徒への説明等）、生徒の有する問題行動と心理的脆弱性、理解できない、LGBTQとしてのアイデンティティ、情報の共有（生徒間、教師間）、教師側の認識不足、相談にうまくいかなかった、将来の心配などがある。教師と生徒の相互関係においてLGBTQと教師の認識のずれや教師のなかでの認識の違いもある。しかし、今回のアンケートを通じて、LGBTQについて勉強していく教師が増えた。なぜなら、いじめの原因と思われることを先生や親に言うことが出来ず、学校へ行けなくなり、不登校や進路変更が生じることがあるからである。

LGBTQの生徒たちは、自分自身が嘲笑の対象とされる可能性があることや、存在そのものを否定されるようなメッセージを日々の生活の中で、受け取ってしまうことが多くある。誰が信

頼できる大人であるかしっかり見ている。そのため、この先生ならば自分のことをわかってくれるだろうと信じて、教師に期待して、本当の自分を話してもらえる教師を求めている。

LGBTQで悩んでいる生徒たちは、親や先生に相談できずに偏見で見られ、いじめられたり、自分のことを自責したりして自傷行為に及んでいる生徒が多い。かつて、自傷行為をしている生徒の悩みは、人間関係や家庭内の問題がほとんどと考えられてきた。しかし、近年は性的な悩みとしてLGBTQの問題が注目されている。ある調査によれば、64%が自殺を考え、14%が未遂という現実がある。また、LGBTQで悩んでいる生徒たちは、心理学的にも人に関わる職業につきたがる人や依存関係に陥ることが多く、同性関係で悩む子が多い。そういった生徒を何らかのメッセージがあれば、精神的に苦しむ前に教師が早期に悩みを聞いてあげ、予防することが大切である。

4. 教職員の意識（専任・常勤19人）

学校生活アンケートでは、教師に対する不満が書かれており、騒がしい授業があることについてのものが多かった。そのため、「気をつけたり、改善したか」の問いについては、ほぼ半数以上の先生が行っていると回答し、成果が少しみられるようである。

これから取り組むべき課題としては、生徒に合っていない授業内容や学ぶ姿勢の弱い生徒を如何に指導すべきかの研修・教職員間の連携の強化などが挙げられる。一つ一つ大切な問題であり、解決に向けて努力する姿勢が見られた。また、生徒に学校生活アンケートを実施して「よかった」と回答した教員が17人いた。理由として「情報が入る」「意識啓蒙につながる」「やはり、年に何回かはアンケートをし、生徒たちの訴える場を作る必要を感じるから」「生徒がどのように考えて

いるのか、アンケートを通して見えるところが多かったから」「いじめ防止対策推進法上、必須である」「個人名を書かない、封筒に入れる、という対応をしていることで、より本心に近い意見を聞くことが出来ていると思うため」「いい方向にしようという雰囲気があるから」「生徒の状況がよくわかった」「生徒の声を聞くことが出来る」「率直な意見もでる。反省材料になる」「面と向かって聞くだけでは得られない答えもあったと思うから」と前向きな意見が寄せられた。

5. 生徒とのかかわりについて

A校は、看護教科のテスト問題の出題の仕方が、一般教科とは少し異なる。一般教科のテスト範囲は、優しい問題から難しい問題まで基準を変えることが可能だが、看護教科はあくまでも看護師試験のレベルであり、平均点を下げるためにあえて医師レベルのような問題を出題して難しくはしない。そのため、しっかり勉強して国家試験に受かる実力がついている生徒は本当に試験問題が易しく、早く終わる。また、衛生看護科はそこを目標としているため、看護科目の平均点は本当に高い。そのため、かならず、最後の問題に、「時間があつたら点数はつかないが、実習とか他のこととか悩みがあれば書きなさい」というスペースを作っている教師もいる。ほとんどの生徒がなんらか書いてくる。その答案に一人一人メッセージを書き入れ、心のこもったアドバイスを書いている。特に学校生活アンケートで気になる生徒には、その悩みを少しでも改善になるようなメッセージをそえている。また、生徒が書いた言葉に教師も元気もらい、自身のやる気、やりがいを感じ、教師としてのステップアップをしている。今の生徒は、本当に「教師に話を聞いてもらいたい」、「かかわってほしい」、「しかってほしい」という生徒が多い。しかし、生徒たちが納得する答え、安心感を与える教師のカウンセリング能力、言葉

で伝える能力がないと、教師不信を与え、逆効果になることが多い。A校では、生徒と教師のつながりはこういったかかわりを重視している。

今の生徒は、昔と比べて弱いではなく、これだけの情報化社会に生きていく息苦しさに苦しんでいる。常に連絡が取れ、居場所がわかり、誘惑も多く、ストレスが増大である。我々教師も今の時代に合わさなければならないのである。ネット社会は、教師が一番遅れており、生徒に追いつくのが大変である。しかし、追いつかなくても「あなたのことはわかっている」「理解してあげる」ということの気持ちを生徒たちに理解してもらうことが大切である。生徒たちは、話せる、相談できる、メッセージを送る教師を選べるのである。担任と相性が合わなくても、教科の先生や養護教諭がいる。生徒がルール違反しても、その場で発見した教師が注意して、指導できなければならない。それをせずに、その生徒と上手くいかない教師に、生徒の良く使う言葉「チクル」というような行動で報告すると信頼を失うのである。話しやすい環境をつくるのが、我々教師の仕事である。学校生活アンケートを通じて、常にアプローチをかけて、チームとして「絶対この子を助ける」「更生させる」という思いが、教師も育ち、生徒と教師のつながりが生まれてくると思われる。

6. おわりに

今回の教員アンケートから、今後も続けてアンケートを実施し、データ集計、分析、評価を行い、報告書を作成し、具体的な対応策を検討するのが良いと思われる。その後、データ結果の意味づけをどのように行うかが鍵である。あくまでも統計的な数字であり、分析結果は数学上の理論である。学校現場では日常的に生徒たちと接している経験豊富な先生方の直感が、統計的分析の結果を上回ることが多い。教員がある事柄について徹底的に議論を行い、対策方法を見つけていくことが重

要である。アンケート調査は、あくまでも生徒から教師に対しての一つの情報伝達手段であり、これを実施することがいじめに対する一つの予防策であると考える。

世間で見るといじめに関する統計は、学術論文では統計の「信頼度」が重視されるが、学校現場では教師の判断が、「信頼度」である。アンケートの結果で自分のクラスや学校には「いじめがない」と安心するのではなく、いじめが起きる前に気付く教師の直感力、見抜く力を磨くことが大切である。

学校がいじめ防止のために、このようなアンケートだけではなく、生徒の目に見える形で、一人一人の生徒に気配りができている姿勢と実践を示さなければ、生徒は消極的になり、不満を言うだけになる。いじめは起こってから対応では遅く、起こる前にいじめの芽を摘むことやいじめを事前に防ぐための対応をとっていなければならない。「いじめはうちのクラスにはない」から「いじめはいつでも、誰にでも起こりえることである」という認識に改めなければならない。いじめは健全な心の状態では決して行われない。心が不健全になったとき、毎日が面白くない、自分だけが我慢させられている、頑張っても誰も認めてくれない、誰も目をかけてもくれない、息抜きが

できない、ストレスが発散できないといった時に、人は弱い者に当たってしまう。これがいじめの芽である。教師には、生徒一人ひとりをよく見て日々の変化に気がつくことのできる観察眼と感受性が求められる。常にアプローチをかけることにより、生徒と教師のつながりができ、教師のスキルアップにつながっている。いつの時代も生徒たち一人一人に目を配る教師集団を作り上げることが、生徒の過ごしやすい学校づくりに必要である。

参考文献

- 庄島幸子 「学校教員の性的少数者に対する対応(1) -対応に困難を感じる場面の質的分析-」
日本教育心理学会第54回総会資料；2012年 p 114
- 中間茂治 「いじめ問題の現状とその防止、対応について～現場教師から見たアセスメント、プランニングについて～」日本生徒指導学会第14回大会資料；2013年11月
- 日高庸晴 「子どもの“人生を変える”先生の言葉があります」<http://health-issue.jp/>
- 八並光俊・国分康孝他. 新生徒指導ガイド. 東京：図書文化社；2008